

第3回ピースツーリズム推進懇談会 会議要旨

1 開催日時

平成29年9月11日(月)10:00~12:00

2 開催場所

広島市役所本庁舎14階 第7会議室(広島市中区国泰寺町一丁目6番34号)

3 出席者

懇談会構成員

団体名・役職	氏名
広島県原爆被害者団体協議会 事務局長	前田 耕一郎
広島市立大学広島平和研究所 副所長	水本 和実
特定非営利活動法人ANT-Hiroshima 理事長	渡部 朋子
特定非営利活動法人ひろしまジン大学 代表理事	平尾 順平
被爆体験証言者(平和記念資料館元館長、元国際平和担当理事)	原田 浩
一般社団法人日本旅行業協会中四国事務局 事務局長	辻 孝和
ひろしま通訳・ガイド協会 会長	古谷 章子
広島市市民局国際平和推進部 部長	津村 浩
広島市経済観光局観光政策部 部長	阪谷 幸春

(計9名、欠席なし)

事務局

観光プロモーション担当課長、課長補佐、主査、主事

株式会社JTB中国四国営業企画課長、地域交流推進課ディレクター(計6名)

4 議題

- (1) 第2回懇談会における意見を踏まえたピースツーリズム推進の「目指す姿の方向性」と「今後の検討の方向性」について
- (2) 具体的な検討内容について
 - ① 情報発信について
 - ② ルート設定等について
 - ③ 迎える市民の積極的な関与について
- (3) 意見交換

5 公開・非公開の別

公開

6 傍聴人の人数

3名

7 会議資料名

資料:ピースツーリズム推進懇談会(第3回)

8 発言の要旨

(原田座長) 今日もたくさんの説明を受け、ご意見をいただくことが予定されている。回を重ねるごとに協議内容が充実していることに感謝申し上げたい。次につながるような展開をしていると嬉しく思っている。意見交換の時間を充分にとりたいたため、前回同様、まずは配付資料の

全般について事務局から説明をお願いしたい。

《事務局から資料に基づき説明》

◆第2回懇談会における意見を踏まえたピースツーリズム推進の「目指す姿の方向性」と「今後の検討の方向性」について

(原田座長) 各項目毎に各委員からご意見をいただくが、行政委員2人については、他の委員の発言が終わった後にご発言いただきたい。

(前田委員) 目指す姿の方向性について、「被爆の実相に触れるとともに・・・」という記述について、「被爆の実相に触れる」というのはすべてのことを通してではないか。その観点からすると、「国内外の来訪者が」以降の記述を、①被爆前からの歴史、文化、普通の市民の生活があったこと、②それが原爆によって徹底的に破壊され、その後市民の苦難が長い間続いたこと、③市民の努力によって復興を遂げて現在があり、市民は平和を大事にしていること、の3点に整理すると私にはしっくりくる。

「来訪者が平和とは何かを考え、平和への思いを共有していく」というところについては、一足飛びに「共有」ができるだろうか。共有というのはなかなかできないので、「それぞれに平和への思いを形作っていく」という程度の記述でもよいのではないか。

(渡部委員) 目指す姿の方向性については、概ね良い方向にまとまってきていると思う。ただ、被爆の実相とは何か。前田委員は、広島に来て全てを通して被爆の実相を感じていただくということを言われたが、残念ながら、中核となる平和記念資料館（以下「資料館」という）を含め、本当に被爆の実相に触れていただくには充分でないと感じている。資料館は工事中ということもあるが。機会があれば、被爆の実相の情報発信のあり方についても議論ができればと思う。これは一番の根幹である。その根幹の発信の仕方が本当に充分なのかどうか、改めて考え直す必要があるのではないか。きちんと議論をして、そのうえで言葉を積み上げていきたい。

今後の検討の方向性は非常に具体的に書かれているが、資料館も含めて、情報発信について考えるとき、バーチャル頼り、インターネット頼りになりがちである。それだけでは上滑りになるような気がする。情報を得ることはできても、気持ちに深く刻まれる機会は少ない。人や現実の物など、リアルな世界の情報発信を大事にすることによってこそ、今の世の中の流れと逆行しているかもしれないが、本当に伝わるのではないか。

(古谷委員) 具体的に訪れていただいている方々を知る者として、何日か泊まらないとこのルートは見てもらえないものであり、来られる方にどのように前もって知らせればよいか、すごく大変なことだと思う。海外から来られた方と約2週間ご一緒して、一番印象に残った所を聞くと広島だと答え、人類の未来にとって大事な所であり、しっかり時間をかけて見たい、また来る、と言われた。2回目、3回目と来られたときに見ていただくことをきちんと固めるということは大事なことだと思うが、ルートの設定や、そのルートを見ていただくために滞在時間をどうとるかなど、具体的なオペレーションを考えると、率直な意見として、気が遠くなる。

(水本委員) 目指す姿の方向性の「平和とは何かを考え、平和への思いを共有していく」というところに関して前田委員が言われたことに同感である。平和への思いの共有という前に、最終

的に広島悲惨な体験を理解してもらうことも大事なことだが、来られる人の出身の国や地域にも色々な悲惨な体験がある。彼らが自分達の国や地域に戻って、自分達の悲惨な体験を二度と繰り返さないために、どう平和を作るかということもポイントだと思う。そのような人達が来ていることも念頭に置いて、方向性案を書いていただきたい。広島が高みに立って平和について説教するのではなく、「広島はこのように平和をつくってきました、皆さんもがんばってください」というメッセージを与えられるのがよいと思う。

(平尾委員)「来訪者が平和とは何かを考え、平和への思いを共有していく」ということに関しては、来訪者だけではなく、私達市民も考えないといけない。広島のことを知りなさいという姿勢だけではなく、もちろん広島で起きたことを知ることは大事だが、核兵器をどう廃絶していくかについて私達もまだ答えが見えていないなか、核兵器禁止条約は正しいステップなのか、どうアプローチしていくか、私達自身も学んだり行動していかないといけない中で、来訪者と市民が平和とは何かともに考えるという姿勢も大事ではないか。それに向けての仲間作り、共感する人の和をこのツーリズムを通してできていけばよいのではないか。上からというよりも、共に考えていく姿勢がここで表すことができればと思う。

(辻委員) 渡部委員が言われたことについて、私もリアル主義ではあるのだが、今はインスタグラムなど色々な形の情報発信手段があり、広島に来てもらうためのきっかけ、フックとしては色々な手段により情報発信することが必要だと思う。昨日の10時からの「グローバルアジェンダ」というBSテレビの番組で、外国の人が核兵器禁止は夢か、実現可能かということについて5名くらいで討論していた。その中で、アンドリュー・ウェーバー氏が、世界の人が広島に行ってほしいと言っていた。このような発信の仕方ができると、多くの人に広島に来ていただき、実相を見ていただくことにつながる。先ほど言われたようにそれぞれの国の背景があるので、お仕着せではなく、広島を見て怖さや苦勞を知ってもらうために、まず来てもらうことが大切だと思う。来て興味を持って、平和についてそれぞれに考えていただくことが大切なので、そのきっかけとなるといった主旨を、難しいと思うが事務局で表現をまとめていただければと思う。

(津村委員) 被爆の実相に触れるということと、平和への思いの共有ということについて、平和行政を所管している部署としては、対外的にはこれらの言葉を継続して使っている。広島市の平和推進における基本として事あるごとに使っているものである。慣れすぎてしまっている面もあるかもしれない、上から目線、押し付けにならないようにという視点は非常に大事だと心に留めておきたい。ただ、これらの言葉は消すのではなく、前田委員が言われた順番がどうかということについて、歴史や復興を見てもらった後に実相に触れていただくという言葉を持つてくるなど、文章の工夫の仕方があると思うので、これらの言葉はぜひ使っていただきたい。

バーチャルによる発信ということに関しては、ピースツーリズムの肝は、辻委員が言われたように、まず来ていただいて滞在を伸ばしていただくことであり、そのために、観光政策部もアンケートなどから分析し、外国人観光客はスマートフォンで情報収集しながら巡られる方が非常に多いということなので、現実的にとっていきべき方策ではないか。ただ、リアルとのバランスは大事である。両方をいかにうまく使っていくかということではないか。

資料館の実相を伝える機能が不十分ではないかという指摘については、担当部署としては言いにくい、言われるとおりだと思う。再整備のため、メインの被爆資料を展示する本館が工

事中であり、先にリニューアルした東館で一部しか紹介できない状況にある。東館の導入展示と実相を見た後の復習として核開発のこと、その後の世界の軍縮に向けた動き、広島復興と、本館を見た後で見てもらいたいような内容が、工事の行程上先にできた。被爆の実相を紹介する機能が不足しているというのは、色々ご指摘もいただき、職員もそう感じている。引き続き、資料館とも意見交換しながら、どのような改善が図れるか、課題として考えていきたい。

(阪谷委員) 目指す姿の方向性と今後の検討の方向性は、皆さんの意見を取り入れて、具体と抽象の間をとったような形で作っていかないといけないので、そのあたりに難しさがある。目指す姿の方向性は、将来の状態を示すものである。一番大事なものは、被爆前の広島を見て、被爆直後の広島を見て、そして被爆後の復興した広島を見るという、広島の実情を見ていくことで、広島を取組んで感じてもらいながら、将来、来訪者が平和とは何かを考えて平和への思いを共有していくという、将来の状態を示す主旨で書いている。前田委員が言われたように、一足飛びに共有できるものではないと考えている。事実を確認することを積み重ねながら、将来、自分の思いの中で平和を共有していくことができるということである。その際、決して上から目線ではなく、あくまでも、訪れた方自身が、自分達にとっての平和とは何なのか、一緒になって考えるということを目指している。

渡部委員の言われたアナログ的なリアルな発信ということに関しては、バーチャルに偏重するものではない。バーチャルとリアルのバランスをしっかりとっていくことが重要である。リアルに発信する方策を、これから回を重ねる中で見つけていかないといけない。既に第1回、第2回の懇談会でリアルな発信とは何かについて委員の皆さんから意見を出していただいているので、その整理を懇談会の中でしていくことで、このような形でリアルに発信できるのではないかとということを見つけていくことができるのではないかと思う。

(原田座長) 事務局から説明を加えることはあるか。

(事務局) ご意見をいただいたように、平和への思いは一足飛びに共有できるものではないため、被爆前からの順を追った表現にした方がよいと感じた。また、リアルの世界を大切にしないといけないこと、共有の前に苦難があったことを伝えていかないといけないとのご意見があったので、表現を考えてみたい。

(原田座長) 委員の思いを集約できるよう事務局と努力したい。

資料館の展示内容についてのご意見があったが、平和事業の受発信について考える時に、文化事業も一緒にしていく必要があるのではないか。つまり、芸術活動を通じて平和を希求するような事業展開すれば、文化事業にも関わってくる。後ほどご議論をお願いしたい。

(水本委員) 発信というものは、何らかの形でバーチャルにならざるを得ない。バーチャルなものも発表しつつ、最終的にはリアルなものという表現がよいのではないか。

(前田委員) 今後の検討の方向性に関して、このような内容が中心ではあるが、「平和」ということに関しては、人は原爆のことだけでなく、色々なことをイメージする。具体的には、今まで意見が出ていた宮島のことや、夜の過ごし方など、そのようなことにも繋がるようなことも織り込むことができればよいのではないかと思う。

◆具体的な検討内容

①情報発信について

(水本委員) 発信というのは、若い人になじみがあるのはスマートフォンで、年輩の方は違う。最終目的はいかにリアルなものに到達するかが重要であり、目的と手段は分けて、多様なものを活用することが必要だと思う。

「平和」という言葉は、実は使う人によって、意味が異なっている場合が多いので、漠然とした使い方は、なるべくしない方がよいと思う。皆それぞれの平和観を持っている。具体的な説明をして、全体を通して平和とする方が共有できる。広島市の平和のイメージは重要であり、市民間では平和は共有しやすいが、世界の全く違う平和のイメージを持っている人とは、共有すべきなのは痛みや苦難であり、それを通して最終的に平和をつくることに繋げるというのがよいのではないか。

(平尾委員) 発信するだけでなく受信もしないといけない。世界の動向には疎く、私達のことを知ってくださいという一方的なコミュニケーションではなく、相手のことを知り、相手の立場を踏まえて、伝え方を考えないといけない。目指すのが核兵器の無い世界であれば、そのために一緒に考えるという姿勢を情報発信の次のステップに持ってくるべきである。

(辻委員) 私は広島出身ではなく、広島では当たり前のことでも、私は知らないことがある。なぜ折り鶴が広島の平和を象徴しているのか。誰もそれをあまり詳しく説明しない。情報発信の道具として折り鶴を使っているのかもしれないが、きちんと説明されていないように思う。情報発信をする時には外の人視点で考えてしないと、すんなり理解してもらえない。

ルート案の8時間というコースでは、お腹いっぱいになり過ぎるのではないか。先ほど、押し付けにならないようにとの発言もあった。見ていただきたい所はたくさんあるのですが、見る人が見たいところを選べるようにしないと、情報発信も押し付けになってしまう。来訪者が選べる選択肢をたくさん用意しておくのもよいのではないか。

(前田委員) ある場所などについて情報発信する際、その中心となる情報だけでなく、関連する情報もたくさん見られるようにしておくことが必要ではないか。

(渡部委員) 平尾委員に同感で、受信するというのはすごく大事だと思う。今年8月に南アフリカで原爆展に参加したのだが、場所はヨハネスブルグとケープタウン、2都市にある2つのホロコーストセンターだった。ホロコーストセンターが、自分達のホロコーストの体験だけではなく、幅広く広島・長崎についても考え、その他ナミビア、ルワンダの虐殺についても考えるという方向に向かっている。懐の深さ、教育的配慮を持って、子ども達に情報伝達していく姿に感銘を受けた。私達もそこから学ぶことがあるのではないか。

水本委員が言われた、苦難の中にいる人は世界中にたくさんおり、その人達がどんな思いで広島に来るのか。それをしっかりと受け止めることができはじめて、こちらの情報発信もできる。その姿勢は忘れてはならない。

「平和」という言葉が頭の中に入らない人が、海外にはたくさんいる。だからこそ、あえて今こそ「ピース」・「平和」という言葉を言う必要もあるかと思っている。

今資料館の地下を掘っており、そこで真っ黒に焼けた土の断層が出てきている。これはすごいことだと思うが、私はテレビで見て初めて知った。広島市民にすら伝わっていない。平和文化センターと資料館の被爆の実相についての発信の仕方が、市民に対しても弱くなっている

のではないかと。

東館については、本館を閉館するのであれば、東館が本館であるべきだと思う。その他の復興のことなどについてはあの場所でもなくとも情報発信ができるはずである。あの貴重な東館のスペースの中で、本館の展示がごく限られたものになっていることは、広島市の被爆の実相を伝えようというエネルギーが弱くなっているのではないかと。一番大切な施設なので、考えていくべきである。

最近JR広島駅がきれいになり、品川駅みたいである。どこにでもある駅になってしまった。広島駅で降りた人が、ここが広島駅だと思えるかけらが何も無い。あれでよいのか。駅周辺には再開発で新しいビルもできた。広島らしい発信をしているものは一つもない。広島の雰囲気があればよいのか。カープはあるが。広島駅の雰囲気が、以前よりも増して、どこにでもある地方都市の顔になってしまっているのが残念で仕方がない。

広島市のホームページと長崎のホームページとの間に決定的に違う点がある。長崎のホームページは平和に関するページが独立している。広島市は、広島市のホームページの中に埋もれている。これも情報発信について再検討が必要ではないかと。

(古谷委員) 今の資料館の物足りなさはずっと感じている。週3回くらい外国人のお客様を案内するが、とても辛い。でも、来年の7月に本館がリニューアルオープンされて、それを見てコメントしようと思っており、今は言いたいことは差し控えたい。今年の4月に東館を案内したとき、もうガイドは辞めたいと思った。この状態の資料館を案内するのは、今までやってきたことと違う。でも諸般の事情があると思うので、来年7月まで待ちたい。

辻委員が言われた佐々木禎子さんの千羽鶴について、ガイドの仕事始めて38年になるが、最初の数年は佐々木禎子さんの話を知っているか聞くと、8割方知っていると答えた。最近では知っているのは1割にも満たない。教えると、すごく良い話だと思われ。大事なコンテンツはきちんとおさえて情報発信をしていかなければいけない。

ウェブサイトについては、資料館を駆け足で見ることになったときは、平和記念資料館のウェブサイトが多言語で整えてあるので、読んでくださいと伝えるようにしている。

(津村委員) 複数の委員から話のあった、共に考えること、受信ということは大事だと思う。ヒアリング調査の中でも、世界の戦争の情報が得られた方がよいといった意見もある。そのような視点は確かに大事である。資料館について厳しいご意見をいただいたが、貴重なご意見として受け止める。この場はツーリズムとしてどのようにしていくかということが主軸であり、資料館については折に触れてご意見をいただければと思っている。

(阪谷委員) 渡部委員から広島駅に広島の発信のかけらが無いとのご指摘があった。広島駅は今改装をしているが、自由通路の壁面を使って、JRが平和のイメージを出す取組をしており、広島市も後援している。広島に来られた方が、初めて降りたときに、ここが広島であると感じられる発信は非常に大事だと思うので、観光部門においてもそういったことを念頭に関係者と話をしていきたい。

ピース、平和という言葉はどうするかについては、私は、今だからこそ、平和という言葉を出していった方がよいと思う。平和とは何なのか、平和な状態かどうかを見るには環境、飢餓、貧困など様々な観点があるが、ピースツーリズムの中で目指す広島の平和は核兵器廃絶と世界恒久平和とした方がよいのではないかと。これがどんどん広がることによって、委員の皆さんが

言われることに到達するとよい。

(原田座長) 渡部委員が言われるように、情報発信について、中心になるべきなのは資料館である。情報受発信施設そのものであるべきなのに、残念ながら充分でない。本館は来年7月に開館予定となっているが、東館の開館は、当初の予定から1年余りずれてしまった。本館が来年7月にリニューアルオープンできるのか。本館の開館が、また遅れることになれば、東館の相当部分を使って被爆資料の展示ができないかと思う。来訪者は本館の展示を見に来ている。私は国の内外から社会人団体や修学旅行生を迎えているが、彼らの意見を聞くと、ジオラマをなぜやめたのかなど現在の展示に不満を持っている。資料館は実物展示が必要だといっても、ジオラマほど心に焼き付けるものをなぜなくしたのかという意見が多い。最近の新聞の投書でも数件あった。被爆の地層が出てきたが、展示されている被爆資料は1つ1つの点でしかないが、これは面として出てきた。あの瞬間に命を奪われた多くの市民の姿が目の前にあり、これほど貴重な資料はないのに十分に活かされていない。情報発信の中核となる資料館のあり方も、この中で議論し、意見をまとめていくのも必要ではないか。古谷委員は本館がリニューアルした後にコメントすると言われたが、そうするとまたその段階で次の問題点が出てくる。このような懇談会があるのだから、今の段階で議論した方がよいのではないか。

②ルート設定等について

(原田座長) 事務局がたくさんの資料を用意している。これに加えた方がよいものもあろうが、どこまでどのように中身を詰めていくか、皆さんのご意見をいただきたい。

(前田委員) 資料10ページの「来訪者が考えることができる場、ニーズに応じて選択できる場を組み込む」との記述については、意味が取りにくい。「来訪者が考えることができるよう、またニーズに応じて選択できるようにすることを、ルート設定にあたっては考慮に入れる」ということではないか。

個々のルート案については、各施設等について色々な情報があるので、それを網羅的に示してはどうかということもずっと思っている。例えば、別紙2-2に縮景園が示されているが、縮景園はどのような紹介の仕方をするか。文化・文学を巡るルートに位置づけられているが、縮景園は戦前は泉邸という浅野家の庭だったことから広島文化であるかもしれないが、被爆時には避難場所であり、ここでたくさんの方が亡くなられており、またここで撮影された写真をもとに埋葬された人がいたということも分かってきている。それぞれの箇所に色々な話が詰まっている。原爆のことを中心に、歴史のことなどにも触れて紹介していけば、色々なところに行かなくても、そこだけで色々なことが分かるということもあるのではないか。紹介の仕方を色々にしたらい。

(渡部委員) めいぶる～ぷと徒歩、自転車によって巡るのはよいと思うが、ぴーすくるは使うのが難しい。イコカやパスピーというものもあるのに、なぜこれらが使えないのか。使うことができれば、もっとたくさんの方がぴーすくるで巡っていただける。また、自転車を使うにあたって、最近、歩道ではなく車道を通る部分ができおり、危ないと思っている。

めいぶる～ぷについては、レモンルートなどルートが3種類あるが、それらがどう違うのか来訪した外国人に分かるだろうか。

対面で、来訪者のニーズ、時間、予算等にあわせて、個別にルート进行提案できるとどんなによいかと思う。広島駅でもよいし、平和記念公園でもよいので、市民の皆さんに関わっていただくという意味でも、対面で話をしてアドバイスができ、さらに、来訪者の今回のスケジュールでは巡るのが難しいがおすすめルートの示して、ぜひ再度お越しくださいと声を掛けることができるよ。広島は海外からのリピーターがあまりいない。見ることが出来なかった部分があるので、また広島に来ようとモチベーションを持っていただくことができる仕掛けができないか。旧広島市民球場跡地など活用されていない場所があるので、そのような仕掛けをする場所を設定できるのではないか。

(古谷委員) 皆さんに宣伝したいのはまんが図書館である。若い訪日客にはまんがはとてもパワフルなコンテンツになる。日本語がとても上手な10代の外国人に、どうしてそんなに日本語が上手なのか聞いたところ、日本のまんがで覚えたとのことだった。東京の三鷹の森ジブリ美術館や京都国際マンガミュージアムが有名だが、広島まんが図書館はあまり脚光を浴びていない。県立大学のオーストラリア人の先生に日本のまんがについてレクチャーしてもらい、まんがが大事だと思った。はだしのゲンなどは大きな情報発信力がある。竹原はまんがの舞台になったのに宣伝が足りておらず、またNHK朝の連続テレビ小説「マッサン」の舞台でもあったのに情報発信ができていなかった。良い事例は「この世界の片隅に」である。広島と呉を中心にした良い作品で、アメリカのウェブサイトを見ても、ウェストコーストの施設でこの作品の上映会をするといった情報が出てくる。まんがで広島のことを伝えるのも効果的であることから、まんが図書館を宣伝していきたい。

(水本委員) 情報発信について先ほど言い忘れていたが、外国人は外国人だけのネット情報をお持ちである。日本語が全然分からない人は、違う世界で色々情報を得ているので、この点についてヒアリングをされたらよいと思う。

ルートについて、案はよくできていると思うが、全体の所要時間が8時間の場合、4時間しかない人は途中までで回れるコースとか、2時間しか時間がない人はここを回ればよい、など、途中から始めたり途中でやめてもよいことを念頭に置いたコースにすればよい。また、この3案を重ねたとき、だぶりがいい方がよい。あと、コースはできるだけ循環型の方がよい。始点と終点が決まっているとその通りに回らないといけませんが、循環型であれば、どこから初めてどこで終わってもよくなる。セルフガイドツアーをしたい人には自由に組み立てができるオプションもできるような示し方をした方がよい。

(平尾委員) ルートをどのようにアウトプットするかによるが、もしマップのような形にして、水本委員が言われたセルフガイドで自分で歩けるようにするなら、このルートのまま施設だけをプロットしたものでない方がよい。以前紹介した長崎さるくの平和のカテゴリーのマップでは、被爆建物や慰霊碑とともに、ここで皿うどんが食べられますといった店の情報などを載せることで今との繋がりを感じることができるようになっており、ちゃんとツーリズムに寄っている。学び+旅行という観点も取り入れられていて、うちの若いスタッフにも人気である。平和を学びながら今の長崎を知ることが出来るという点において、有用だと思う。

また、ルートを設定するうえでストーリーが大事だという話からルート案にテーマ性を持たせているのだと思うが、一つ大きなストーリーは被爆者の皆さんの体験ではないか。これはルート案にある文学、文化、市民生活の復興等のテーマと共存し得るものであると思う。〇〇さ

んが避難した経路を歩いてみようとか、〇〇さんが学んだ小学校はここだなど、〇〇さんの生活を垣間見ることができるルートというのはどうか。爆心地との距離感を実際に体感できたり、その時見えた雲の形をビルの間にイメージできたりと、街を歩きながら追体験ができる。人を軸にルート設定するのは一つの方策だと思う。

(辻委員) 水本委員が言われた循環型ということについて、前回提案しためいぷる～ぷの特定の便を新たにピースバスとしてコース設定することがこれに該当するものであり、ガイドが乗り込んで要点を説明することで市民との接点もできる。

原点は平和記念公園にある。普通に考えると、来訪者は先に平和記念公園・原爆ドームに来るので、その後どこに行こうかとなった時に示すルートをこのピースツーリズムで設定する。例えば、無限大のマークのような形で、片方の輪が4時間コース、もう片方の輪も4時間コースの組み合わせで、来訪者が選択できるものがあればよいと思う。

先ほど話した禎子さんの折り鶴について、県外や国外から来た人になぜ折り鶴が平和を象徴しているのか分かるように、原爆の子の像のところで説明し、そこから色々なコースのルートが循環型で出ているというのがあるとよい。

この3つのルート案は、事務局が一生懸命プロットしてくれたと思うが、これを全部まわろうとすると大変なことになる。この中でも、代表的なところをまわり、あとはバーチャルなのであとから情報を調べられるという方が、より現実的で実施しやすいと思う。

(津村委員) 被爆建物等の重要な施設をプロットされ、文化・文学などのそれぞれのテーマ毎にほとんどの主要な施設を3つのルートによく落とし込まれていると思う。他の委員も言われたように8時間などかなり長いので、この中でも特にここここは押さえ欲しいといった情報が提供できる工夫があるとよい。循環型という視点も大事だと思う。平尾委員が言われた人を軸にしたストーリーを見ていただくのに、佐々木禎子さんのストーリーは非常に象徴的だと思うので、禎子さんと折り鶴のストーリーが一つできればよいと思う。

(阪谷委員) 前田委員が言われた縮景園であれば浅野の歴史もあり被爆のこともあるというように、1つの所について網羅的に書いたらどうかということに賛成であり、各施設毎に整理していくことが大事だと思う。事務局でルート案を3つ作っているが、ルートから外れた所は、どのような所で、どうしたらそこに到達できるのかということを書けば、ルートに入っていないでも個別に行くことができる。渡部委員が言われた対面でルートを説明するということは、私も大事だと思う。例えば、市内にいくつか観光案内所があるので、ルートができた時に、案内所で、あなたは今ここにいるのでここからこのように回れる、今回の滞在時間がこれだけであれば、次回ぜひここからまわってみてくださいといったご紹介もできる。市の観光案内所、民間の観光案内所、JRや空港が連携すれば、来訪者に対面で心が通う案内ができる。

(平尾委員) 現場に行ってみると、このような場所もあったと気付くこともあると思うので、タイミングとしてはいつがよいか、今年度か来年度か分からないが、テストで実際に歩いてみるという回があってもよいのではないか。マーケティング等の前に、私達が見ながら歩くことで見つかることもあると思うので、そのような場をまた設けることをご検討いただければと思う。

(原田座長) めいぷる～ぷに乗る機会があるが、広島城のバス停で外国人がたくさん降りる。ところが、広島城がどこにあるか表示もないし、天守閣も見えない。来訪者が必要としている情報の提供が充分でないと感じるので、平尾委員が言われたように、ルートの設定にあたっては、

委員の足で歩いて考えてみる必要がある。

私は広島で生まれて育ち、被爆し、戦後の復興の中で中学・高校を迎えた世代であるので、辻委員が言われた原爆の子の像の話の聞いてハッと感じた。原爆の子の像が建立されたのは高校生の時であり、原爆ドームを遺す運動が起こったのは市役所に入った頃、世界遺産登録は私が担当したので、当たり前を考えていた。皆さんの意見を織り込んでいくことが、今回のルート設定にあって最も大事なことであると感じている。

③迎える市民の積極的な関与について

(水本委員) 何らかの形で市民の協力や飲食店など民間の方の協力をいただきたいが、強制はできないので、自発的にやりたい方に研修をして資格をとっていただくようなプログラムがあった方がよい。その場合、飲食店の方は、協力して赤字になってしまえばはいけないので、研修を受けた人がいる店には表示をできるようにして、経営にも何とか貢献するというプログラムができればよい。

(平尾委員) 元々広島市の事業であった、国外から来られた方を広島駅でおもてなしするという活動を、現在ひろしまジン大学が実施している。この活動のため英語を話せる人を募集すると、本当にたくさんの応募がある。こんなにも外国人と接点を持ちたい、自分の英語力を使って広島のために何かをしたいという人が多いということを見ると、ルートを設定して一緒に歩く人を募ってみて、その人自身の学びになるような入口をつくると効果的だと思う。

(辻委員) ルートを設定すれば、その近くの住民や店などの協力を得ないといけないので、もっと一般の広島市民に知ってもらう必要がある。ボランティアガイドを募ることについても、そのようなものができたことを情報発信する必要があり、会場を借りて説明会をするなど丁寧な情報発信をしないといけない。行政は、パンフレットをつくってそれでおしまい、最初の半年、1年はよいが、その後あれはどうなったんだということがよくあるので、そうならないようにお願いしたい。

(前田委員) 水本委員の意見と同意見である。街中にボランティアが散在するというだけでは対応できないので、飲食店などスポットで対応するのがよい。何らかのメリットがその人にあるほうがよい。

色々なルート、場所があることを広島に来てから知るというのではしんどい。パンフレットやインターネットなどにより、あらかじめ周知できる方策を考えるのがベターではないか。

(渡部委員) 広島の中にもたくさんの慰霊碑があるが、慰霊碑を建てた方々が高齢になり、手入れがされていないところが結構ある。被爆体験を子ども達にどう継承するかという課題もあるので、もし小学校等で協力していただけるなら、慰霊碑を子ども達の手で整備して、なぜ慰霊碑がそこに作られたかについても学んでいただき、子ども達が発信者になっていただく。広島それぞれの地域の中にある被爆の痕跡を小学校単位などで見直していただき、そこを守っていくということと同時に、子ども目線で考えたことを発信していくというものがあればよいと思う。ピースツーリズム推進懇談会の中で、これまで学校というものが出てきていなかったが、このようなやり方も考えられるのではないか。

折り鶴を折りますというボランティアがたくさんおり、丁寧に折って海外の方に差し上げている。喜んで持って帰っていただける。小さなことだが、市民の方に関わっていただけること

である。

(古谷委員) ヒアリング調査でのYMCAの中奥事務局長の意見で「市民が来訪者や研修生のホストファミリーとなることができる制度をつくる。」とある。広島にはホームステイ協会というものがあり、友人がお世話になった。受入家庭は私達と同じような年代の方が多い。子どもがいる若い家族に、子どもが異文化に触れることができる機会として声掛けをしたら、組織化でき来訪者にホームステイに来てくださいと呼びかけられる形になるのではないか。このホームステイビジットのシステムを、平尾委員のひろしまジンの関係などでできないかと思う。

(津村委員) 委員の皆さんから貴重なご意見をいただいた。語学ボランティアは、活動されている方がいる一方で、活動したいが機会が無い方もおり、そのような方にも、平尾委員が言われた学びの機会になるようなことも示しながら、加わっていただく仕組みができたらいと思う。

渡部委員が言われた、小学校にご協力いただくのも大事なことだと思う。本川小学校は、資料館を持っていて平和教育にも熱心であり、国際会議の主催者が希望すれば、学校で子ども達や地域の方々と交流するプログラムを提案されている。国際会議はプログラムがぎっしり詰まっているので利用する方は多くはないようだが、このような取組をされているので、本川小学校に何かご協力をお願いすることは考えられるのではないか。

折り鶴ボランティアも何か一緒にできればと思う。

(阪谷委員) ボランティアで活動されている方の関心を高めつつ、そういった方々への情報提供やスキルアップのために、行政として平和と観光が一緒に何かできないかと思った。

観光客を呼び込むために食べ物がおいしいので来てくださいということをしているが、飲食業の方々に、広島の食をアピールするだけでなく、このような観光スポットがある、ここを見て回ったらどうかということに来訪者に話していただけると、平和への思いが広がっていくのではないかと思う。

前田委員が言われたあらかじめ周知することについては、旅行業者などの民間事業者と連携するなど、どうすれば相手方に先に伝えることができるか検討してみたい。

(原田座長) 平尾委員が言われた広島駅での受入は、赤いビブスを着て、週末に数名が駅構内を行き来し、自分から外国人来訪者に声をかけて案内しているが、広島ならではの活動であろう。駅構内から電車やバスの乗り場まで案内しており、来訪者はとても喜んでいないか。

津村委員から本川小学校の話があった。本川小学校と袋町小学校には平和資料室が設けられており、各小学校が管理している。学校は平和教育をしているが、個々の展示内容に教員が充分に対応できるかという、少し無理があると思っている。ある程度平和行政部門が関わっていくことにより、充実したものになるのではないか。

市立の高校が10校ほどあり、その中で独特の平和事業の発信活動をしているのが基町高校である。被爆者の体験を高校生が自分の絵筆で描いている。経験したことの無い悲惨な状況を聞きながら自分の絵筆で描くのであるから、彼らにとっては大変なことだと思うが、被爆体験の継承につながるし、多くの方に伝えることができる。舟入高校は、以前から、創作した原爆劇を上演している。市立商業高校はピースデパートという事業をやっていて、東日本大震災の地域から仕入れることによりこの地域の復興に貢献することを経験し、広島のメッセージを発信することにつなげている。市立工業高校は金属製の鶴を作っている。これらを市立高校としてまとめて平和情報の発信が出来ないかと考えている。

先般、北海道新聞のホームページを見てみると、「札幌商工会議所がタクシーの運転手をらーめん通にする」という記事があった。札幌でらーめんなら、広島ではお好み焼きかけつけ麺ということになる。観光客がタクシーで気軽にらーめん店の情報を得られるように、運転手に市内の店を食べ歩いて、らーめん通になってもらう事業を始めるそうだ。札幌市内の約 50 店舗の協力を得ながら、タクシーの運転手には 500 円程度の格安でらーめんを提供し、サービスや味の内容について札幌商工会議所にレポートを提出し、らーめんタクシーの認定を受けて専用ステッカーを貼るという制度のようだ。150 人の認定を目指し 11 月から始めるようだ。

今日もご意見をいただいたが、具体的な成果をあげるようにとりまとめていきたいと思う。

渡部委員が言われた地区の子ども達が地区の慰霊碑を守るということも、各学校の学区の中で取組につながってくれば、広島の小・中学生の平和教育もより充実したものになると思う。教育委員会の職員の皆さんと議論をして思うのは、教員の中に被爆体験がある人がいないため、被爆体験がいかにか悲惨なものかということが、共有されていない部分があると感じた。被爆体験の証言を聞く機会も少なくなってくることを考えると、情報発信・受信がますます大切なことだと思っている。

◆その他意見交換

(渡部委員) 前回おりづるタワーの話が出たが、おりづるタワーの方達だけと話をするのは難しいと思うので、そういった方達と意見交換できる場が誕生するとよいと思う。

伝承者の皆さんが一生懸命取り組んでいるが、皆さん活躍の場を求めている。ピースツーリズムの話をし、ご協力をいただくことができればよい。

辻委員が言われた禎子さんの話に関して、実は「おりづるの旅」という絵本を 23 言語に訳して、色々な所にお届けしている。広島に来られた方に一番最初にお渡しすると、絵本なので、大切な部分をすぐ読める。読んでいただいた後に資料館等に行ってくださいることができる。

(平尾委員) 原田座長にうちの活動を褒めていただき、ありがたく思っている。広島市の事業として受託し始めて、今は自主事業として継続しているのだが、若い学生から年輩の方までボランティアの皆さんは積極的に活動をされている。おもてなしをしているようで、自分達の学びにもつながっている。ボランティアの方にとっても学びがあるからつながるのだと思う。両方に Win がないと続かないし、両方の Win がうまく働くときによい形になる。このピースツーリズム推進事業自体も、外から見たら観光だが、中から見たら、私達にとっては教育になっているという、対で考えることが大事である。学校教育においても、例えばここをアウトプットの場としてガイドをやってみようなど、海外から来た人に小学生が案内するんだという身近な目的ができれば、平和教育ももう少し具体的にならざるを得ないだろうし、子ども達にとっては大きなアウトプットの場が設けられる。目的意識のある学びは大きな成果を生むと思うし、そういう場に海外から来られる人からの見え方もよいものになると思う。観光の対として教育、人材育成を意識していくとよいのではないか。

(水本委員) 参考情報だが、首都大学東京の渡邊英徳准教授が広島女学院中学・高校の生徒達と一緒に作っている「ヒロシマ・アーカイブ」という、バーチャルな地図の上に被爆体験を落とし込み、地図にかざすと被爆体験が読めるウェブサイトがある。是非、参考にして欲しい。

(原田座長) 福山工業高校もこのような事業に取り組んでいる。教育委員会には、市立工業高校

できないかと伝えておいた。

資料館がアウシュヴィッツ博物館と連携して事業展開をしようと考えている。アウシュヴィッツは国立博物館なので、国のレベルで議論がされていて、今までのやり方を調査することにより、それを今日のツーリズムにつなげることができるのではないと思う。かつて、アウシュヴィッツに多くの人を迎えたいということから、市内にディスコなどを設けたことがある。来館者は増えたが、市民感情から、長続きしなかったと聞いている。こういうやり方には無理があったのだろう。アウシュヴィッツのメッセージをしっかりと発信することを原点にしないといけないということであり、ツーリズムの策定に役立つのではないか。最近では色々なカリキュラムを持って、2、3日程度の研修の場も作っているので、その情報をまとめて提供してもらい、事業の参考にしたいと思っている。

(阪谷委員) 先日、加藤友三郎顕彰会の事務局の方から、このピースツーリズム推進懇談会の新聞記事を見て取組に共感しており、できれば、中央公園にある、ワシントン軍縮会議で功績のあった加藤友三郎の銅像もポイントに加えていただけないかのご提案があった。我々の取組がメディアを通して発信されて、市民の皆さんが発意をもって我々にフィードバックしていただく循環ができるのは大きなことだと思う。皆さんのご賛同をいただけるなら、これも追加させていただければと思う。

(水本委員) 中央公園には、太田洋子文学碑もあるので、中央公園として加えたらよい。

(原田座長) それも一つの方法だと思う。

時間が充分にとれず、しっかりご発言いただけたのか不安もあるが、次回にご発言いただければよいと思う。

(事務局) 目指す姿の方向性と今後の検討の方向性について、皆様から修正のご意見などをいただいたので、それを踏まえて整理をしていきたい。具体的な検討内容についても、情報発信、ルート設定、市民の積極的な関与それぞれについて具体的なご提案をいただいたので、それを踏まえて整理する。次回の懇談会の日程は、少し間が空くが、10月23日から27日の間でまた日程調整させていただければと思う。また、本日も提案のあった、実際に現地を確認することについても、事務局で候補日を複数ご提示するよう考えていきたい。皆さんが一同に集まるのは難しいと思うので、2～3回に分けて実施するなど、また調整をさせていただきたい。